

## 環境事始 十九帖 白蟻防除剤の蔓延

～悠久の昔から地球を守って来た虫を殺す人間の自業自得～

加藤 龍夫著

水銀に始まる毒物の普及は国民のあらゆる生活面に拡がった。殺菌、消毒、防腐は植木、ペット、建築、食品、衣料などなど、つまり衣食住すべて。毒と知りつつまた薬と言って騙されて人々の健康を冒すようになって行った。研究室では当然それらの多くの場面に関わるようになった。正面それに対抗する機関がなかったからである。統計をとろうとしてないから正確には分らないが、それらによる癌患者は相当数になるのではないか。一つの凄ましい例が白蟻消毒剤である。新しい団地の主婦の注進があつて、勧誘されて床下に農薬を撒いて体調がおかしく困っている、調べて下さいと。行って見ると三十軒ほどの一戸建て団地で、過日業者が回ってこの地区で白蟻が蔓延して消毒して歩いている。主人も留守ですからと断ると、調べるのは只ですからと床下に潜って予めポケットに忍ばせた白蟻の動いている奴を見せて、大変です消毒しないと四千万の新築住宅が駄目になりますと脅されて契約した。勿論行政は消毒を支援してきた。第一建築基準法からして建築木材を防蟻処理をしないと住宅公庫から資金が借りれない仕組みになっている。土台が腐っては住宅政策の趣旨に反する。しかし世の中はそんなに単純なはずはない。この時分防蟻剤はクロルデンであつて、これは塩素系毒物で発癌性で残留性で効果抜群。そしてその住宅を調査の結果、床下の空気から  $1 \sim 10 \mu\text{g} / \text{m}^3$ 、一階と二階に居間からはその  $1 / 10$ 、屋外の倉庫からはさらに  $1 / 10$  が検出された。一旦撒かれたら十年も二十年も毒を吸って暮らさなければならぬのだ。事実その十年後、自分自身と両隣癌を発症したと知らせがあつた。あまりにも被害歴然だから、クロルデンは製造禁止となった。途端に都内の店頭から買い占められて姿を消してしまった。法律などそっちのけでその後も混ぜて使われているだろう。とに角取り締めりの体勢が杜撰であれば無法者の種は尽きまじである。環境に関しては規制緩和は悪人を助けるだけで百害あつて一利ないのは明白。クロルデンが駄目となって代わりに有機燐系農薬の使用となった。ところがこちらは発癌性はないものの神経毒だから、その弊害が出始めた。まず視神経にくるから日本人の近眼が増える、国連の調査報告で日本で眼病が急増したのがその時期と一致する。さらに切れる粗暴犯の増加も無縁ではありえまい。なにしろ毒を塗った材料で住宅を作れなど文明国のする仕事ではないだろう。そもそも白蟻は人間などいなかった太古からどこにもいた地球の清掃屋であつた。倒木が腐って土に戻らなければ困るのだ。それを毒殺しなければ暮らせないなど人間の方が明かに狂っている。白蟻は性質上、材木があり、湿気があり、風通しがなければ必ず発生する。反対にその一つでも欠ければ絶対発生しない。自分の都合の悪い場所に住めと強制しても巣を作るわけがない。だから建築行政として日本の環境に合った、つまり伝統的軒が深く、床が高く、通風のよい住宅の普及を図るのが先決ではないか。住宅業界の利益優先、健康無視の家作りを掣肘するのも環境科学の仕事だった。防蟻剤はその一つ、先生達の調査がどれだけ寄与したかは知らぬ。あれから大分経って今現在は改善され、業者に訊くと毒物を使わない工夫がされているらしい。ただ農薬会社と行政の癒着があつたのは否めない事実である。農薬による室内汚染の本格的な研究に関しては改めて書くことがあろう。